OPINION
オピニオン・スライス
SLICE

インタビュー日
2020年9月17日（木）

NHK放送総局特別主幹（前NHK大阪拠点放送局長）有吉伸人さん

NHK総合テレビ「プロジェクトX 挑戦者たち」、「プロフェッショナル 仕事の流儀」、「ドキュメント72時間」等の企画に関わり、NHK大阪拠点放送局長（インタビュー当時）としてNHK大阪を統括された有吉伸人さん（現・NHK放送総局特別主幹）に、大阪局を訪ねて、お話を伺いました。

1. 劇団そとばこまち時代

―― ご出身は山口県の防府市で、映画をよくご覧になっていたということですが、将来は放送関係に就こうとお考えになっておられたんですか。

考えていなかったです。中学、高校ぐらいのときに映画関係の仕事に就きたいなと漠然と思っていただけですね。

―― 大学は京都大学に行かれて、「劇団そとばこまち」に入られたのですね。

入学したばかりの４月に、京都の劇場でつかこうへいさんの「熱海殺人事件」という代表作の上演がありました。僕、それまでお芝居を見たことがほとんどなかったんですが、その演劇が衝撃的な面白さで、ものすごく興奮して見終わって出てきたところで、当時は京都大学のサークルだった「劇団そとばこまち」がチラシを配っていたんです。チラシに団員募集もついていて、「ちょっとお芝居に興味が湧いてるんですけど」と言うと、「じゃあ、稽古場に来る？」と言われて、そのまま稽古場に行くと、「裏方が足りないから手伝ってくれるとうれしいな」と言われて、そのまま入っちゃったんです。

―― 大学時代はもうそれ一辺倒ですか。

そうですね。今となっては勉強ももう少しちゃんとやっておけば良かったと思いますけど。劇団では演出もやりましたが、舞台監督といってスタッフの取りまとめ役とか、小道具とか、音響効果とか色々やりました。

４回生になるまで芝居一色でしたが、卒業後どうするか、深く考えていませんでした。そのまま劇団に残ってプロになっていく人も

いましたし。ただ先輩でテレビ局に就職した人が何人かいて、就職活動はテレビ局を受けてみました。そうしたら、NHKに受かったという次第です。

2. NHK 熊本放送局時代

―― NHKに入られて熊本に行かれたのですね。

当時ディレクターの採用は50人ぐらいで、NHKの場合、最初は地方の放送局で色々なことを経験するところからスタートすることが多いのですが、僕は熊本に赴任しました。

演劇をやっていた時はお客さんが目の前にいて、受けている、楽しんでくれているというのが分かるんですね。それが大きな力だったし、ものをつくっている喜びだったんですけれども、テレビというのは反応が直接分からないという中で戸惑いもありましたね。

―― 熊本時代にはどのような番組を作られたのですか。

ラジオドラマを１本作りましたが、それ以外はドキュメンタリーというか、取材をして作る番組でした。あとは中継をやったり、全国を回る「のど自慢」にも関わりました。

―― そういう経験が財産になっているのですね。

あらゆることをその４年間で教わったと思います。

20代の若造が、この仕事に携わっていなければ絶対にお会いできないような方にお会いできたわけですから、そのインパクトは特大でした。取材の直接的なテーマに関することだけでなく、その方々の考え方とか生きる姿勢に触れて、感じることが多かったです。すごく大きなものを背負っている方もいらっしゃったし、ごく普通の方なんだけど、はっとするような言葉をおっしゃって、こちらの心が揺さぶられたということもありました。

―― NHKの番組を拝見すると、子どものころ見ていた昔のドキュメンタリー番組よりも、今の番組の方が、人をすごく深く掘り下げて、丁寧に丁寧に時間をかけて本当によく取材されているということをすごく強く感じます。

そうお感じになっているとすれば、撮影機材の進歩によるところが大きいかもしれません。かつては、外に撮影に行くカメラは基本的にフィルムでした。テープに収録するビデオカメラがポータブルになり、外のロケに使うのが一般的になったのは、1980年代の半ば以降ではないかと思います。フィルムは１巻き３分で１回撮影したら現像して終わりです。使い回しができないフィルムは高価ですから、長期間密着したり、長時間、撮影を続けたりすることは相当ハードルが高かったと思います。ビデオテープは何回か使えますから、延々カメラを回して決定的なシーンを狙うことも可能になります。今ではディスクでさらに長時間撮れますし、カメラマンではなく、ディレクターが市販の小さなカメラで１人で撮る場合もあります。相

手の方との距離感はぐっと近くなりますよね。テクノロジーの進歩が、番組の掘り下げとか取材の深さにも影響を与えている面があるかもしれませんね。

3. プロジェクトX

―― 「プロジェクトX」は有吉さんの企画なんですね。

番組は一人で作れるものではないので、僕が企画したというのは語弊がありますが、番組の誕生には一から関わりました。2000年春にNHKで大きな番組編成の改定をすることになり、その前の年に大々的に新番組募集が行われたんですよ。私はその締切の日の朝になっても企画を何も書いていなくて、会議までに何か書かなきゃなと思って、朝早くに家を出たんです。満員電車の中で、どうしようかなと思っていたら、ある広告が目に入りました。「アポロ11号 月へ行く 全10巻」みたいなビデオの広告でした。その時「プロジェクト」というキーワードで企画書を書こうとぱっと浮かんで、局に行って「20世紀はプロジェクトの時代だ。そこには無名の人たちの知られざるドラマがある」と数行だけ書いて、取りあえず出しました。

僕の上司が「これ、もうちょっとちゃんと書き直したら?」と言ってくれて、後日「有名プロジェクトの無名の人達の物語」というコンセプトで企画書を作ったんです。でも、もともとの発想がアポロ11号から来ているので、日本の話というわけではありませんでした。それに対し「日本人の挑戦の物語に絞ったほうがいい」と言われて書き直したり、その他、様々なアイデアが加わってだんだんと企画が練られていき、結果的に新番組として採択されました。とはいえ、企画は通ったものの実際に番組は出来上がっていないので、一体どんな番組になるか、毎週一定レベルの番組が出せるのか、正直不安でした。僕はそのときデスクというプロデューサーの補佐的な立場だったんですが、ディレクターが当時の関係者を探しだし、話を聞いて帰ってくると、毎回びっくりするぐらい面白い話があるんですね。こんな秘話があったのかみたいな。あ、これは面白い番組になるかもと思ったのはその時です。その後、様々な出会いや幸運にもめぐまれ「プロジェクトX挑戦者たち」という番組が誕生したというわけです。

4. プロフェッショナル

―― 「プロフェッショナル 仕事の流儀」も有吉さんの企画なんですね。

「プロジェクトX」は過去の話を徹底的に取材して掘り起こすものでした。一方で、今、動いている人を撮りたいという気持ちも生まれてきまして。共通しているのは「仕事」の番組ということですね。「プロジェクトX」をやっていた頃から「仕事」という切り口が僕には響くものがあったんでしょうね。そうして、次の「プロフェッショナル」を企画していくことになります。

―― 「プロフェッショナル」では、こういう話を聞き出そうということで行っているのですか。それとも、取材をして密着していく中で、この人からこういうメッセージを伝えられるんじゃないかとなるのですか。

「プロフェッショナル」に関して言うと、事前の取材は非常に短くて、実際に撮影に入り、密着する中で伝えるべきことを見つけていくという作り方です。

「プロフェッショナル」はその人の仕事とか仕事の哲学を伝えることが主眼なわけですけれども、最初に取材に伺って「仕事で一番大事にされていることは何ですか」と聞いたときに返ってくる言葉と、撮影期間、ずっと付き合っていく中で見えてくるものが違うことがあるんです。皆さん、普段から自分の「流儀」を考えながら仕事をされているわけではありませんし、本当に大事にされていることが必ずしも意識化、言語化されているわけではないですよね。取材者がそれを見つけていく。もちろん、それは１つじゃなくて様々あるのですが、番組の時間内に全部を入れることはできないので、そぎ落としてそぎ落として、最終的に形になっていくという感じでした。

―― そういう手法は「プロフェッショナル」の中で出来上がっていったんですか。

事前に取材をして最初から分かっていることだけで作るよりも、実際に撮影に入ってから思いもよらないものが撮れ、それを大事にしたほうが豊かになる番組もあると思っています。

また、事前の取材で質問してお答えいただいても、テレビは映像がないと使えません。そこで、インタビューに行ってもう１回同じ

ように質問して撮影するわけですが、僕は、若い頃から少々違和感を感じるところがありました。取材されている方はどう感じておられるのだろう、とか。

事前に徹底的に調べて作るやり方がふさわしい番組はたくさんあります。一方で撮影の中で色々なことを発見していくスタイルの方が面白くなる番組もあるとずっと考えていて、それが「プロフェッショナル」に反映されているといったところでしょうか。

5. ドキュメント72時間

―― 「ドキュメント72時間」も手掛けられていますね。

「72時間」は最初の１本だけプロデューサーをしました。「プロフェッショナル」がスタートする直前に、やっぱり締切があって書いた企画です。「クローズアップ現代」で定点観測の番組があって、それがとても面白かったので、レギュラー番組で定点観測をやってみたら面白いんじゃないかというシンプルな思いつきの企画です。レギュラー番組というのは個性的なフォーマットがあった方が視聴者に印象づけられるし、作る方も作りやすいということがあるので、定点観測をフォーマットにするという売りで企画書を書いたんですね。

じゃあ、その期間を一体どのぐらいに設定するのかというのが悩ましかったところです。１日もあるし、１週間という考え方もある。当時「24」という海外ドラマが話題になっていて、24時間もありなのかなと思ったんですが、１日でそんなに色々撮れるかなと、不安になってやめました。まあ１回つくってみて考えようということで、２泊３日の72時間にしてみました。結局そのまま72時間で来ています。

僕が関わった「72時間」の１本目は、渋谷駅ハチ公前のコインロッカーの72時間でした。これも偶然ですが、コインロッカーとか面白いんじゃないかと言ってたら、誰かが「コインロッカーって実は（利用可能期限が）72時間なんですよ」と言って、「へー、何か運命的だね。じゃあコインロッカーにしよう」となりました。

ほとんど広報もせず、いきなり放送したんです。それも割と遅い時間です。ところが、いつもに比べてすごく視聴率が高かったんです。えっ、何でこんな時間帯にこの番組がこんなに視聴率がいいんだとびっくりしたことをよく覚えています。

１本作ってみて「何が起こるか分からない」ということが番組進行のエンジンになることがわかりました。また、僕は全く関わっていませんが、レギュラー番組になって回を重ねるなかで、ここに人生が垣間見えるということが番組の魅力、醍醐味となっていったんじゃないでしょうか。企画を書いたときには想像すらしていませんでした。

6. ドキュメンタリーの制作

―― 先ほどの広告を見て、そこから何かにつながるというお話に驚きました。

企画を考えるのが仕事なので、そういう脳みそになっているだけだと思いますが。

でも、取材系の番組にとって企画はあくまでスタートです。テレビは大勢でつくりますから。NHKのドキュメンタリーは、ディレクターとカメラマンと音声マンの３人チームでロケに行くことが多く、さらに編集マンというプロが映像編集をします。第三者の目で編集する意味は大きくて、現場に行っているディレクターが「こう表現すれば伝わるだろう」と思っていても、第三者が見ると「それじゃ、わからない」ということがたくさんあるんです。更に、デスクやプロデューサーが加わり、試写を繰り返し練り上げていきます。そして、音楽をつけ、ナレーションをつけ、テロップを入れてと作業を重ねた末にようやく番組の形になるわけです。なので「総合力」が最終的なその番組の力になっていきます。もっと言うと、出演してくださった方、取材を受けてくださった方が魅力的であるがゆえに、ドキュメンタリー番組は面白くなっているわけで、企画は本当に最初のスタートにすぎないと思います。

―― チームワークも必要ですね。

チームワークはもちろん大事です。そのチームは様々な専門家の集団であり、極めて専門的な細かなスキルの集積によって、番組というものは成立しています。

例えば画面に入る文字「テロップ」を入れる作業があります。映像技術のスタッフが担う仕事の１つです。映像の上に文字が載るので、“縁”をつけないと読みにくいんですが、そこにも様々な技があります。たとえば細めの明朝体は映像に載せると認識しにくく、太

い縁をつける必要が出てくるのですが、それでは明朝のすっとした感じが台無しになる。そんなとき、僕たちにも詳細はわからないのですが、細い文字を上品に浮き立たせるテクニックがあるようなのです。それぞれの分野で創意工夫が重ねられ、その膨大なスキルの集合体が番組なんですね。

―― 番組の結果について関心は持っておられますか。

世の中でどういうふうに受け止めていただいたかとか、どんな反響があるかということですね。それは当然あります。

―― それが自分の感覚とずれているときはあるんですか。

思っていた通りというほうが少ないかもしれません。こんなに大きな反響があると思わなかった、あるいは、今回はいいと思ったけど反響はあまりないなとか、それは色々あります。

7. コロナ禍でのNHK

―― コロナ禍になったときに、色々な番組を放映されました。

ウイルスの脅威については、以前から専門家は起こりうる重大な危機の１つと警告をしており、NHKスペシャルなどで番組を作っていました。また、新型インフルエンザの時の報道の経験などもありますし、様々な形で蓄積はあったと思います。

―― NHKは物すごく迅速に対応されていましたし、科学部の方ですかね、能力がすごく高いのが伝わってきます。

記者セクションには、科学・文化部に医療やサイエンスの専門家が大勢いますし、番組制作のセクションには科学番組のディレクター集団もあります。「ためしてガッテン」や「NHKスペシャル」の科学関係の大型企画、Eテレの「サイエンスZERO」はそこが作っています。

―― そうかと思うと、大阪のまちの取材があったり。

大阪拠点放送局も、公共放送、公共メディアとして、様々な角度から情報をお届けすべく全力で取り組み、これまでの蓄積もフル活用してやってきました。

8. 朝ドラ「おちょやん」

―― 朝ドラの「おちょやん」が11月30日からスタートしますね。

大阪局にとって、年度後半の「連続テレビ小説」、いわゆる“朝ドラ”は大きな柱の１つです。今、全編方言のドラマというのは非常に限られているんです。ドラマは全国放送が多いので、標準語のものが多いわけですが、大阪局制作の朝ドラは地域の言葉に凄くこだわっています。「スカーレット」の舞台は滋賀でしたが、滋賀といっても信楽と大津では違うので、方言指導の方は信楽まで行って地元のお年寄りに色々お聞きしてそれを反映しています。今度は道頓堀ど真ん中の話です。

―― 松竹の方ですよね。

「大阪のお母さん」と呼ばれた俳優の浪花千栄子さんの人生をモデルにしたドラマです。2013年の「半沢直樹」（原作：池井戸潤）の脚本を書かれていた八津弘幸さんの脚本で、ストーリーも抜群に面白いです。

また、大阪の朝ドラとしては初めて４Kで撮影しています。総合テレビでは２Kに変換して放送するんですが、最初から２Kで撮影したものと、４Kで撮影して変換したものは映像のタッチとか深みが違います。映像にも是非注目していただければと思います。

―― 本日はありがとうございました。

（インタビュアー：飯島奈絵　阿部秀一郎　太平信恵）